

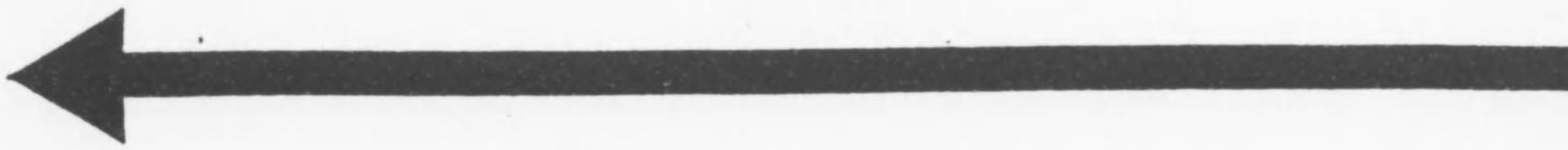
特 240

428

小倉四先生事蹟



始



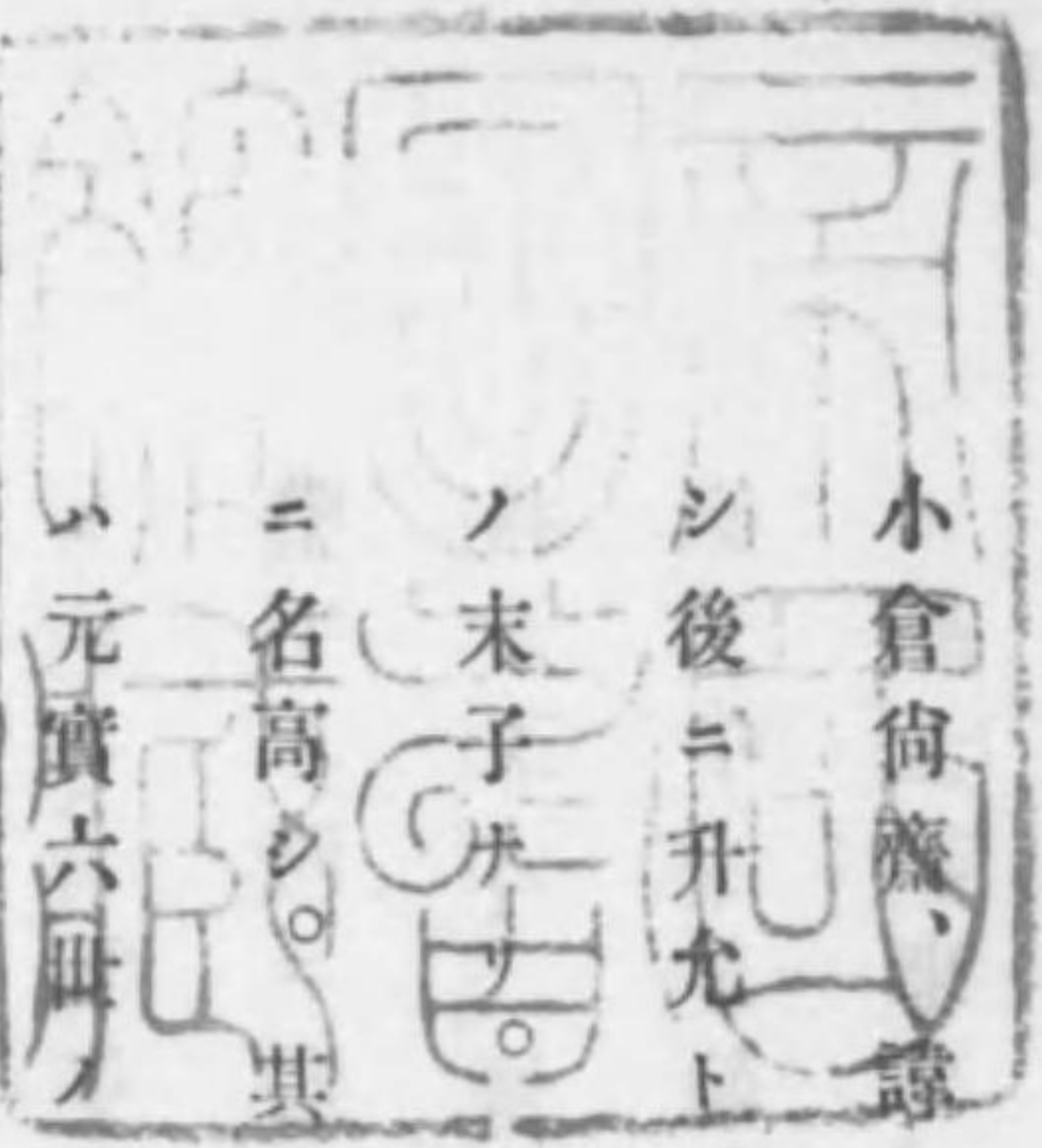
4240
428

昭和二年五月、小倉尙齋、鹿門、南阜、三先生ノ
墓碑銘、兩關唱和集、長門戊辰問様、朝鮮申維翰
ノ海遊記、遜齋先生自記履歷書、四先生遺稿、及
小倉氏所藏ノ舊記ニ據リテ四先生ノ事蹟ヲ記述ス

遜齋先生門人 安藤 紀 一

小倉四先生事蹟

小倉 尙 齋



小倉尙齋、諱ハ貞、字ハ實操、尙齋ハ其號ニテ、幼名ヲ万太郎ト稱
シ後ニ升允ト稱ス。長門萩ノ産ニテ藩主毛利綱廣公ノ侍醫小倉宗爾
ノ末子ナリ。先祖ハ近江源氏ヨリ出デ、左近將監實澄トイフ者、
ニ名高シ。其曾孫元實、始テ安藝ニ來リ、毛利元就公ニ仕フ。尙齋
ハ元實六世ノ孫ナリ。延寶五年生ル。二歳ノ時、麻疹ヲ憂ヒ、餘毒



腫ヲ發シテ、遂ニ跛ト爲レリ。幼少ヨリ穎敏ニシテ學ヲ好ム。初ニ
山田原欽ニ就キテ學ブ。原欽ヨリ少キコト十一歳ナリ。元祿六年十
七歳、七月、三年遊學ノ許ヲ得テ京ニ上リ、伊藤坦菴ニ從學ス。坦

菴ハ、朱子派ノ學者ニテ山田原欽モ、亦曾テ之ヲ師トセリ。既ニシテ期滿チ、自ラ學未ダ足ラズト爲シ、延期ヲ乞ヒ、又三年滯京シテ元祿十一年、國ニ歸ル。藩主毛利吉廣公召見シテ、經ヲ講シ詩ヲ賦セシム。翌年三月、公江戸ニ赴ク。尙齋隨行ス。江戸ニ在リテ、林整字ノ門ニ遊ビ、擢デラレテ助講ト爲ル。寶永三年十二月公ヨリ扶持米五人、切錢三百目ヲ賜ヒ、儒者トナシ、寺社組ニ加ヘラル。正徳元年十月韓ノ使來聘ス。尙齋藩命ヲ受ケテ、赤間關ニ迎接シ、彼ノ學士李東郭、南泛叟等ト筆語唱酬ス。東郭、尙齋ニ詩ヲ寄セ、日東諸士總能文大手騷壇獨許君ノ句アリ。是ニ於テ聲譽大ニ聞ユ。將軍徳川家宣、尙齋ノ詩ヲ覽テ歎賞シ、之ヲ聘用セント欲ス。尙齋、

病ヲ以テ辭ス。享保四年、藩主吉元公、新ニ、明倫館ヲ建テ、尙齋ヲ江戸ヨリ召還ス。時ニ尙齋、江戸ニテ、聖堂ノ會頭役ヲ勤ム。乃チ、其六月、萩ニ歸ル。七月二十二日、明倫館學頭トナル。是歲十一月、韓使來聘シ、江戸ニ事ヲ終ヘテ還リ、周防國龜關ニ泊ス。藩マタ尙齋及ビ山根華陽ニ命ジテ、之ヲ迎接セシム。尙齋、華陽ト往キテ、彼ノ學士申青泉、成嘯軒、姜耕牧、張菊溪、李思辰、權卑牧ト筆語唱酬ス。申青泉ノ遊記ニ、尙齋ヲ評シテ、其人、貌端ニシテ行淳ク、博ク經史ニ涉リ、言論愛スベク、作ル所ノ詩、往々眼ニ入ルベキモノアリト稱言セリ。五年春、役人格ニ列シ、手廻組ニ編セラレ、班、組頭ノ次ニ列ス。凡ソ、藩ノ儒臣ハ、祿多キモノモ、未

ダ此班ニ列スル者アラズ。尙齋始メテ之ニ當レルヲ以テ、當時ノ儒
 林、之ヲ榮トセリ。六年、書手十五人ヲ課シテ、珍籍ヲ寫サシメ、
 殆ド一千卷ニ及ブ。皆、學館ニ藏セラル。翌年元旦ノ詩ニ、鉛黃添
 得青春色、新校芸臺千卷書ノ句アリ。尙齋、館職ノ外ニ、常ニ君前
 ニ召サレテ、經書及ビ貞觀政要等ヲ講説ス。十二年春、足疾治療ノ
 爲、長崎ニ赴キ、四月歸ル。十三年三月、藩士坂時存ノ義子彦平ヲ
 乞ヒテ養子ト爲ス。十七年、藩主宗廣公、新ニ入國シ、十一月廿七
 日、尙齋、明倫館ニテ始メテ公ノ前ニ講書ス。是ヨリ屢々君前ニ講
 ズ。元文二年二月、勤功ニ依リテ賞賜アリ。十一月二日、在職中病
 死ス。享年六十一。ソノ絶筆ノ詩ニ曰ク、嘗懷明壁卧荆山、辟命數

回榛棘間、白玉樓成烟霧散、天風舉手謝塵寰ト。萩城ノ南、大屋和
 泉寺ノ山中ニ葬ル。私ニ諡シテ、長肅先生ト曰フ。人ト爲リ廉介公
 方、直ヲ好ミテ徑行シ、溫藉ノ風ニ乏シト雖モ、人ノ厄窮ヲ視ルコ
 ト、己之アルガ如ク、資ヲ傾ケテ、之ヲ救フ。其ノ人ヲ教フルコト
 方アリ。徳ヲ以テ之ヲ導ク、生徒皆感興シテ學ヲ勤メ、國中之一嚮
 フ。其ノ文學ヲ好ムハ、誠ニ天性ニシテ、少時ヨリ老年ニ及ブマデ
 呻嗶衰ヘズ。身、藩國ニ儒宗トナリテ、斯文ヲ擴張スル功アリ。養
 子彦平嗣グ、是レ鹿門ナリ。

小倉鹿門

六

小倉鹿門、諱ハ、實廉、鹿門ハ其號ニテ、彦平ト通稱ス。三田尻ノ中船頭山本五左衛門孝純ノ末子ニテ、初、坂九郎右衛門時存ノ義子タリ。元祿十六年、三田尻ニ生ル。少キヨリ、學ヲ好ミテ精敏ナリ且、書ヲ善クス。初、河野養哲ニ從學ス。享保六年十九歳、秀才ヲ以テ明倫館諸生ニ舉ゲラレ、業益進ミテ、名、城中ニ盈ツ。十三年二十五歳、三月、館ノ祭酒小倉尙齋、坂氏ニ乞ヒテ嗣子ト爲ス。尋テ、都講ト爲ル。是時ニ當リ、山縣周南、尙齋ヲ輔ケテ、館ノ學政ニ功アリ。鹿門之ニ從ヒテ、其學ヲ受ケ、瀧鶴臺、山根華陽等ト、縣門ノ高足タリ。元文二年、講師ト爲ル、其冬、父尙齋歿ス。鹿門

嗣ギテ家祿ヲ相續ス。四年、藩主毛利宗廣公、公室家譜ヲ修ス。鹿門、其事ニ與ル。延享三年館ノ祭酒山縣周南病アリ。公、鹿門ト、山根華陽、津田東陽、小田村郎山等トヲシテ、假ニ學頭ノ事ヲ行ハシム。寛延元年、宗廣公ノ侍講ト爲ル。館事假攝故ノ如シ。是歳、韓使來聘ス。鹿門、命ヲ受ケテ、赤門關、竈關ニ、之ヲ迎接シ、彼ノ學士朴矩軒、李濟庵、李海阜、柳醉雪等ト唱酬ス。寶曆五年三月重就公ニ隨ヒテ、江戸ニ赴キ、世子重廣君ノ侍講トナル。九年、館事ノ假攝ヲ免ゼラレ、專ラ、侍講ヲ勤ム。十二年、明倫館學頭ト爲ル。明和元年、中風ヲ患ヒ、猶ヨク強ヒテ講授ス。四年、病癒エザルヲ以テ職ヲ辭スレドモ聽サレズ。蓋、儒家之ニ代フベキ者ナキヲ

七

以テナリ。安永四年マデ辭スルコト五回ニシテ、始テ聽サル。在職四十年、藩主二代ノ恩遇最厚ク屢々賜賚アリ。職ヲ去リテ、尙、學頭ノ班秩ヲ給與セラル。安永五年七月二十日歿ス。享年七十四ナリ。大屋和泉寺ナル尙齋墓左ニ葬ル。鹿門人ト爲リ溫仁雅重ナリ。藩中學徒之ヲ蟻慕ス。妻ハ境氏、二男二女アリ。長男實文嗣グ是レ南阜ナリ。

小倉南阜

小倉南阜、諱ハ、實文、通稱尙右衛門、南阜ハ其號ニテ、鹿門ノ長男ナリ。幼ニシテ、初、家ニ學ビ、十四歳ノ時、明倫館ニ入ル。明

和四年二十二歳、會頭役トナル。九年十月、暫ク、三田尻ノ越氏塾ニ遣サル。藩ノ制、越氏塾ノ學事督勵ノ爲、館ヨリ儒員ヲ輪番ニ遣サル。是時、繁澤豊城番ニ當レドモ、病アルヲ以テ、南阜其代理ニ當レルナリ。諸生ニシテ、コノ任務ニ當ル、其學才知ルベシ。南阜館ニ學ブコト十八年、學術大ニ進ミ、名、上下ニ知ラル。安永五年七月、父鹿門歿ス。南阜、家督ヲ繼グ。十月、館ヲ退ク。尋テ十二月、明倫館助講トナル。翌年講師トナル。寛政五年、騎隊ノ役ヲ以テ江戸公邸ニ勤仕シ、兼ネテ、公子憲熙君、熙和君等ニ、經ヲ授ク。コノ憲熙君ハ、後ノ藩主齋熙公ニテ、當時十一歳ナリ。九年、擢テラレテ、藩主齋房公ノ侍講トナル。職ニ在ルコト十年。公ノ東觀ニ

從フコト二回ナリ。文化四年、江戸ニ在リテ病起ル。因リテ、乞ヒテ國ニ歸リ、退職ヲ許サレ、終身近侍ノ班ヲ以テ特遇セララル。翌年十月十六日歿ス。享年六十三。大屋和泉寺ナル尙齋墓後ニ葬ル。妻野原氏、子ナシ。阿曾沼氏ノ子ヲ養ヒテ嗣ト爲ス。之ヲ實光トイフ。

小倉 遜齋

小倉遜齋、諱ハ、實敏、字ハ公修、通稱ハ尙藏トイフ。遜齋ハ其號ナリ。モト長藩士内藤三郎右衛門之茂ノ三男ニテ、幼名ヲ助三郎トイフ。文化二年八月七日、萩平安古ニ生ル。九年甫テ八歳、儒員小倉百合榎實光ノ假養子トナル。實光、父南阜ノ後ヲ繼ギ、戶主タル

コト僅ニ五年ニシテ、是歳五月、明倫館入學ノ第四年に病死ス。齡蓋シ猶ホ少カリシナラン。遜齋、其後ヲ繼ギ、扶持方五人、銀三百目、外高二十五石ノ相續ヲ命ゼラル。是時、尙藏ト改稱ス。幼ニシテ穎敏、學ヲ好ム。十三年、十二歳、始メテ、藩主毛利齋熙公ノ前ニテ、書ヲ講シ、詩ヲ作ル。賞賜アリ。翌年二月、明倫館聖廟百年祭ニ、藩主ヨリ、文武師家ニ物ヲ賜フ。遜齋ハ、晒上下ヲ賜ハル。文政二年十五歳、二月朔、始テ、明倫館ニ入ル。是時中村華嶽、山縣太華、更番ニ學頭タリ。遜齋之ニ師事ス。六年正月、城番ヲ勤ム七年二十歳、六月明倫館助講トナル。十年三月、山縣太華藩主齋熙公ノ侍講トシテ江戸ニ赴クニ當リ、公許ヲ得テ、助講ノ職ヲ帶ビ、

太華ニ隨ヒテ赴ク。翌年歸館ス。其歲、兼常氏ノ女ヲ娶ル。十二年廿五歲、三月二十五日、講師ニ擢テラル。二十九日退館ス。天保二年八月廿六日、百姓一揆防禦ノ爲、梶杜伊勢ニ屬シテ、福井ニ出張ス。八年三十三歲三月晦日御手廻組ニ編セラレ、藩主敬親公ノ侍講ニ任ゼラル。當時、公、江戸ニ在テ遜齋ヲ召ス。是時、國家、漸ク多事ナリ。公新ニ立チ、人材ヲ登用シ、藩政ヲ釐革シテ、勤王ノ事ニ從ハントス。遜齋ハ、其ノ拔擢ノ一人ナリ。十年、明倫館講師兼任ト爲ル。十二年三月、公ニ從ヒテ東行ス。四月、佐藤一齋ノ門ニ入ル。五月江戸櫻田ノ藩邸ニ、有備館ヲ創設セララル。遜齋命ゼラレテ學制及ビ釋菜式ヲ定メ、教務ニ從事ス。六月、長沼流兵家清水俊

藏ニ從學ス。公命ナリ。九月、公、大學頭林訖ニ入門ス。遜齋モ侍講ノ身タルノ例規ニヨリテ、之ニ隨ヒ入門セリ。之ヲ御添入門トイフ。是歲、先藩主齊廣公ノ著事斯語上梓御用掛トナル。弘化二年、公ノ東行ニ隨フ。五月、國史纂論、民政要編上梓御用掛トナル。嘉永元年九月、公ノ深川湯治ニ陪從ス。三年、明倫館助教添役トナリ其ノ十二月二十九日、明倫館學頭山縣太華、職ヲ罷ム。遜齋、中村牛莊ト共ニ學頭座用取計ヲ命ゼラル。五年正月、命ヲ受ケテ、村岡伊右衛門ト共ニ、服忌令調査ノ事ニ當ル。二月八日、世子廣封公（後ノ元徳公）ノ侍讀兼勤ヲ命ゼラル。是ニ於テ、遜齋ハ、上、公父子ノ師トナリ、下、衆士子弟ノ教育ヲ統ブ。六月、服忌令調査ノ事

ヲ以テ、江戸ニ赴キ、九月歸國ス。六年十一月、夫人兼常氏歿ス。尋テ、河北氏ノ女ヲ娶ル。安政三年十二月廿七日、明倫館學頭ニ任ゼラル。實ニ第十三代ノ學頭ナリ。是時、侍講ノ職ヲ解カル。其在職二十年ナリ。四年、齡五十三歳、與ヲ用キルコトヲ許サル。萬延元年命ヲ以テ平田涪溪、小川甚兵衛、福島吉右衛門ト、藩祖元就公以下四公創業ノ記録ヲ編ス。慶應元年六十一歳、積年ノ功ニ依リテ儒業ヲ免シ、八組士格ニ復セラル。學頭勤務、故ノ如シ。尋テ奥番頭格ニ列セラル。三年二月朔、學頭ノ職ヲ免ゼラレ、更ニ二等官ノ次座ニ列セラル。二年十月、更ニ大教授トナル。三年三月、史記評林上木ニツキ、校正掛ヲ命ゼラル。尋テ、退職ヲ乞ヒテ許サル。四

年六十七歳、家督ヲ男實三ニ讓リテ退隱ス。退隱後尙家居シテ子弟ニ教授シ、傍、大日本史、資治通鑑ノ附考ヲ録ス。十一年五月病起リ、十七日病ミテ逝ク。享年七十四、大屋和泉寺ノ南阜墓左ニ葬ル。遜齋人ト爲リ温厚忠直、己ヲ行フコト恭遜ニシテ、事ヲ處スルコト公平ナリ。學職ニ在ルコト四十五年。上下教化ノ功、先祖尙齋ト始終ヲ相爲セリ。故ニ君ノ恩賚厚ク、藩中之ヲ仰グ。其ノ人ヲ誨フルコト深切丁寧ニシテ、常熟ノ書ト雖、必先ヅ之ヲ檢視ス。誠ニ教授ノ模範タリ。夫人河北氏、男ヲ生ム。卽實三ナリ。

313
604

昭和二年五月十七日印刷
昭和二年五月廿二日發行

山口縣阿武郡萩町大字南古萩三番地
編纂兼發行者 安藤 紀一

山口縣阿武郡萩町大字東田町第五十七番地
印刷者 三好利三郎

山口縣阿武郡萩町大字東田町第三十四番地
印刷所 萩一印刷所

終

非賣品